

Technical news

Vol.7

2004ナショナル
トレセンU-14

2006年度
JFAアカデミー福島がスタート

各年代の日本代表チーム活動報告

JFA公認指導者海外研修会～
バイヤー04レーバークーゼン



財団法人 日本サッカー協会

adidas

(FO東京U-18) とも積極的に判断しプレーしていたが、大胆さと繊細さを兼ね備えたプレーに欠け、失点につながるケースがあった。

クロスに関しては、スターティングポジションを積極的にとれず、広い範囲を守る事ができていたが、セットプレーにおいても同様であった。さらに、雨の中のゲームが多い中で「つかむが強く、パンチの判断とそのプレー」において、パンチングの技術を正確に発揮できなかった。特に、フィジカルコンタクトを受けたい状態の中でプレーにおいて自立した。

攻撃への参加においては、プレッシャーがかかっている状況のときは、列奥的に攻撃に参加することができた。キックの技術も高いレベルにあって、少人数のプレーがかかっていた状況になると、キックの精度が極端に落ちる傾向にあった。配球において、ゲームの流れを的確に察して時間をつけて、ゲームのペースを早急に切り替えるなどの判断にやや欠ける部分があった。

(3) 特記事項

昨年に引き続き大会期間中の25日に、U-17日本代表を含む大会出場の日本人、GK20名による合同練習会を実施した。主としてシュートストップ、ブレイクアウェイの状況下でトレーニングを行った。ゲームの時間を多くとり、その中で基本スキルの発揮をテーマとして行った。

シュートストップにおいては、構える姿勢とそのタイミングにおいては、ある程度意識してきていたが、多少はつきつきがあった。特に目立った現象は、45度～60度付近のポジションにおいてずれることが多かった。

また、ブレイクアウェイのトレーニングでは、スターティングポジションを認識してとれる選手が少なく、準備・予測においても同様を意識している選手は少なかった。特に、攻撃から守備の切り替え時にスターティングポジションを含め準備・予測が遅れる傾向にあった。それは常にゲームに関わることができていないことが原因として考えられる。

このような課題が浮き彫りになり、日本ユースGKの課題として今後取り組んでいかなければならないと感じた。

2. 沖縄県高校招待サッカー

沖縄では天候にも恵まれ、過ごしやすい気候の中で大会が行われた。サニックス杯から引き続きの参加となったが、もう一度

テーマを確認し、またサニックス杯で浮き彫りになった課題を少しでも改善することを目標に活動した。

この大会は2日間で4試合(35分ハーフ)行われた。サニックス杯の疲労も残り、選手たちには厳しい条件ではあった。4試合で3失点したが、セットプレーからみでの失点は無かった。だが、失点ではないけない時間帯での失点があったのが残念であった。

GKのプレーにおいては、シュートストップでは、特にワンタッチシュートに対する準備ができていない場面が目立った。自分の予測を超えたプレーに対しての危機管理、準備が不足していた。

ブレイクアウェイの場面においては、サニックス杯から明らかに改善が見られ、GKがインシアチーブをとって判断できていた。スターティングポジションを状況に合わせて、「観る」→「状況把握」→「準備・予測」→「判断」→「プレー」のサイクルが習慣化されてきた。ただ、連携の部分において声を出すタイミングが遅れ、乱れた場面が見られた。これは今後の課題と考えられる。

クロスにおいては、ブレイクアウェイ同様のスターティングポジションを状況に合わせてとり、積極的に判断してプレーできていたが、状況を把握する中で、特にゴール前のマークにおいて指示して、伝えることに課題があった。コーチングしているが、タイミングが悪かったり、明確ではなかったりする場面が見られた。また、サニックス杯同様ハンチングの技術に課題が残った。

攻撃への参加においては、やはりブレイクアウェイの参加があったときのキックの精度が極端に落ちた。配球においてもまだゲームの状況に合わせて行うことができなかった。沖縄では、試合を順位に進めることが多かったが、その中でカウナーに対してのリスクマネジメント、攻撃から守備の切り替え時の準備・予測を怠る場面が多少見られた。このような現象から常にゲームに関わることも今後の課題として挙げられる。

U-16日本代表チーム

フランス遠征

【報告者】伊藤裕二
(GKプロジェクト/名古屋ランパンバリエイター)

1. GKのテーマ

チームコンセプト (25ページ) を踏ま

え、GKもチャレンジングをすること、そのための良い準備をすることを軸に、次の5つのテーマを掲げた。

- ①良い準備：良いポジションと姿勢から、予測の確かな判断でリスクマネジメントをし、ゲーム中、常にプレーへ関与する。
- ②クロスの対応：積極的なポジションニングをとり、適切な判断で選択したプレーをやり切る。
- ③GKからのビルドアップ：バックパスを受けられることを恐がらず、また、ボールを保持したら状況を見て、最善の判断をする。
- ④DFとの連携：特にベナリティーエリア内では、GKがリーダーシップを發揮し、チームとしてGKの判断を優先させる。チャレンジングとカバードのコンビネーションをとる。
- ⑤チームへの積極的な協力：ピッチ内でも外でも常にポジティブな態度、言動でチームを引っ張る。

これらのテーマをトレーニングやミーティングの中でGKに意識付けするとともに、GKの取り組みをミーティングの中でフィールドプレーヤーにも説明をして、理解と協力を求めた。

2. 準備

集合日 (3月18日) の成田でのトレーニングを含め、7回のトレーニング機会があった。松本拓也 (磐田ユース)、大谷幸輝 (浦和ユース) ともに、Jクラブですべてに活動しているのは、受検期にあるこの年代では非常に助かった。

トレーニングの中では2人ともベナリティーエリア内に入るからいけないかの位置のボール (シュートもクロスもある) に対してのポジションニング、身体の向きが悪かったこと、ワンタッチクロスのタイミングで中央のコーチングをしていたので、ビデオ映像などをを使い改善をした。

松本は、恵まれた身体能力から力強いプレーができるだけに、動き出しの早さが気になったが徐々に改善がみられた。大谷は、積極的なポジションニングと安定した構えながら、好プレーを見せたいが、爆発的なパワーは松本と比べると見劣りをした。しかし、まだ15歳ということを考えると今後に期待が持たれた。

それらを踏まえ、いろいろな位置からさまざまな種類のクロスボールに対応するトレーニングを数多く行った。また、シュートトレーニングも数多く行った。チームはクロスへの対応、攻撃のしかけ、チャレンジ&カバーを中心にトレーニングを行った。

3. 総括

今回の遠征では、監督・コーチの理解があり、GKサイドからの要求をチーム全体の問題として全員で解決しようとする姿勢があり、非常に助かった。また、テクニカルスタッフの原田貴志氏が帯同してくれたお陰で、映像を使って短期間にいろいろな改善に取り組みることができた。

成果としては、クロスボールの守備の安定 (DFも含む) とセットプレーの守備の安定、バックパスの有効的な使用、良い準備とDFとの連携などが挙げられるが、課題としては試合の状況によって的確なことで、より強いリーダーシップの発揮などが挙げられる。

4. 他国のGK

同グループの中のGKは、特別に大型な選手はおらず、全体に身体能力重視のGKが選抜されていた印象があった。イングランドのGKは常に良いポジションニングをとり、サイドからボールを見極めて飛び出していた。カメルーンGKは、上背はあまりなり身体能力が高いGKであったが、基本よりも本能型のGKであった。ゴールキックをDFに蹴ってもらっており、キックの技術は乏しかった。ポルトガルのGKは、日本のシュート数が少なかったためにほとんどのプレー機会がなかった。そんな中で何回か判断ミスはあったものの、DFの裏のカバープレーの意識が高かった。キックはあまり狙ったところに



U-16日本代表チーム/松本拓也 (磐田ユース)

蹴れていなかったし、距離もあまり出ていなかった。

フランスのGKは、細身に身長もそこそこあった。FKでは大谷やイングランドのGKよりも高いポジションニングをしていて、まだ判断には間違いないが、身体能力は高く、特にスローイングは肩の強さもあって効果的に攻撃につながるスローイングができていた。

ベストGKにはコートジョアールのGKが選ばれた。今回はプレーを見ることはできなかったが、身体を見る限りでは上背はあまりなく、どちらかと言うとがっちりしている印象であった。これら他国のGKと日本のGKを比較すると、サイズや技術ではまだまだ劣勢はしなかったが、ゴール前に立ったときの自信のようなものが彼らには共通としてあり、たとえ判断のミスをしたとしても、プレーを最後までやる思い切りの良さがどのGKにもあつた。育成年代では、このような積極的な姿勢を指導者が育てていかなければならないと痛感した。

また、U-16年代の国際大会と並行して、フランス国内のクラブ (U-17) による大会が行われていたが、試合を少し見た感想としてはU-16と明らかにサイズやプレーのスピード、判断のスピードに差があった。感じとしては、日本の大学生レベルで、今回選んだ選手たちが今後1年であのようになることを考えると、まだまだ世界との差はあると感じた。おそらく、今回選んだチームのGKも、今はあまり差を感じないが、今後サイズアップとスピードアップが成されるものと思われる。

2004 JFA エリートプログラム (U-14日本選抜)

【報告者】山中亮
(GKプロジェクト/サンフレッチェ広島)

1. 今回のテーマについて

池内監督より、チームのコンセプトとして「ボールも人も動くサッカー」が示され、ダイナミックにスペースをつくり、そして使い、ゲームの主権を握ることが掲げられた。



GKにおいても、「ゲームに関わり続ける」というコンセプトのもと、「Aggressive Goalkeeping (積極的なゴールキーピング)」「Good Positioning (良い準備)」「DFとの連携」と、前回のプログラムで行われた同じ国のゲーム (2004年12月) から抽出した「ディストリビューション」を今回の選定のテーマとして掲げた (本誌V0.5参照)。また、勝負にもこだわることのできる実践の場でもあるため、「セットプレーへの対応」についてもトレーニングの中で設定した。海外のチームと対戦する数少ない機会でもあることから、その経験の場とも位置づけた。なお、参加選手は金谷和幸 (ガンバ大阪J)、大森圭悟 (岩出FCアズール) の2名となった。

2. 総評

チーム、ピッチ、環境ともに初めての経験となる場面が多かったが、両プレーヤーとも比較的落ち着いて、プレーに集中することができた。身体的にも、海外の年代のチームのGKに対して遜色はなかった。実際のゲームの中でも慣れてきたことがえた。

ゴールを守りながらも積極的なプレーを心がけることができるようになってきているが、1試合を通しての関わりはまだ十分でない。ボールのある局面のみを追っている場面や、たまたま立っているような状態になる場面も多かった。1試合を通して関わりを持ったゴールキーピングが行えるようになることが重要であろう。

左右のアンクルに対するポジションニングはスムーズに選んでいるが、前後に対するポジションの修正が遅い場面が多く見られる。この年代においても、カウナーを有効に攻撃につなげる場面が多く見られ、そのような状況に対しての準備としては、ポジションの修正が遅い場面があった。この

年代のヨーロッパのGKと比較して、特に差があった場面であった。ヨーロッパのGKはよりゴールを守ることを強調されているように、ポジショニングは比較的ゴール前で、ポジショニングが多かった。長身であることもあって、ゴールライン付近でゴールに向かってくるボールを防ぐ場面が多かった。また、精度の低いクロスなどは簡単に処理されてしまう場面も多かった。チームとしての戦術もあると思われるが、ゴールを守るというGKの役割を再確認できるプレーが多かった。

DFとの間わりの部分では、コーチングにおいて実践していたが、良い視野の確保に関しては、ボールサイドとは逆のサイドの確保は十分にまだ行えない状況がみられた。特に、クロスの守備で十分に連携をとることができな場面も見られ、チーム全体としての課題ともなった。

※以上、開催日時18ページ

2004ナショナルトレセンU14

開催地 徳島県(GKプロジェクト/徳島アンダー14)
川原 直幸(GKプロジェクト/U-15日本代表 GKコーチ)

1. テーマ

全体のテーマである「なぜ?」を考えた上で、GKのテーマとして次の3つを掲げてトレーニングセッションに臨んだ。

- 積極かつ攻撃的なゴールキーピング
 - DFとのポジショニング(良い準備)
 - DFとのコミュニケーション
- 実戦の中でプレーを決定するためのベースとなる「観る、状況把握、予測」は常にどのセッションでも求めていきながら、GKとしてゴールを守るために必要なGKとしての基本技術、戦術(ハンドリング、基本姿勢とそのタイミング、ポジショニングなど)を徹底して行った。

そして、フィールドプレーヤーと共通する攻撃の要素(パスコントロール、ボールポジショニング)もトレーニング全体を通じて求めた。トレーニングセッションは、次の3つの状況について行った。

- シュートストップ
- プレイクアウェイ
- クロス
- フィールドプレー(パス&コントロール、ポジショニング)

いないことがこの年代では多いように思われる。

ゲームにおいては、準備が遅い選手が多かった。ゲーム形式の中で、自陣ゴール前にボールが来るまで構えない選手が多く見られた。そのため、夜のGKミーティングでビデオを用いて、どこで準備を始めていくのかを具体的に示したところ、いつ準備を始めるのかという具体的なイメージをつかみ、意識をし始めた。

また、肝心の自陣ゴール前での指示が出せない選手が多く、このことは観て状況を把握しきれないために、何を、どう指示したらいいか判断できていないケースがほとんどであった。また、状況を把握できても、味方に伝えられていないケースもあり、ゴールを守るという責任のもとに積極的に指示の声を出していく習慣を身につけるように働きかけた。

3. 総括と今後の展望

■ 参加選手の内訳

	東日本	西日本
1990年生まれ	10人	6人
1991年生まれ	8人	6人

全体としては、GKとしての基本要素はここ数年で、非常にレベルが向上してきていると言える。そのことは、所属チームや各トレセンでの成果であると感じられる。

この年代は、GKとしての基礎を習得すべき時期なので、構えやポジショニング、移動、キャッチングなどの技術をしっかりと身につけることが重要である。同時に、悪影響がついてしまう時期でもある。今回のナショナルトレセンでも、数名は構えやステップに癖がついてしまっている選手がいた。できるだけ良い基本を身につけられるように働きかけを行ったが、所属チームに戻り、日々のトレーニングの中で継続して取り組む必要があるであろう。今回の指導がその場限りにならないようにするために、継続的な働きかけも必要であろう。

この年代は、レベル、そして発育発達の個人差が大きい年代であり、トレーニングは年齢別にU-14、U-18に分けて行ったが、同じ年齢でも、非常に個人差が大きい年代であると改めて実感した。発育発達に関しては、成長が早い選手と遅い選手があり、指導者はその違いを把握した上で指導にあたる必要性がある。そして、将来に目を向けた選手の発掘という意味で、各選手の成

長段階の違い、トレーニングで変え難い要素である将来の身長や身体的特徴(スピードなど)をしっかりと認識し、選手を評価する必要があるのではないだろうか。

最後に、GKのプレーを改善していくための必要があり、次のプレーを予測する必要がある。次のプレーを確認し、いろいろな状況の中で観て、伝えることを徹底させ、常にリスクマネジメントをしながら、プレーのできるようにアプローチをしていった。

※開催日時2ページ

日本高校選抜

報告者 須田新吾
(GKプロジェクト/東京ヴェルディ1999)

1. 大会におけるGK

大会でのGKのレベルは非常に安定感があり、常にリーダースhipをとりDFラインをコントロールしていた。ボールをキャッチするの弾力性、判断が良く、特にボールをつかむ技術はどのゴールキーパーも優れており、リカバードをつくり失点するという場面を見なかったことは、大会を通して印象に残った。

PSVアイントフォーフェン(オランダ)のGKは、身長が190cm以上あり動きも非常にシャープだった。ゲームの中でも積極的なポジショニングをとりシュート、プレイクアウェイ、クロスに対して常に良い準備ができ、ワールドプレー(ドイツ)にも参加していた。ドルトムント(ドイツ)のGKも優勝チームのGKとして、リーダースhipをとりながら決定的な場面において積極的な飛び出しでピンチを切り抜け優勝に貢献していた。ニューキャッスル(イングランド)のGKは、ボールを奪ってからの切り替えが速く、GKからのロングフィードで得点するなど、チームの攻撃の一つのバスターとしてチャレンスをよく出していた。一見単調な攻撃に感じられるが、得点からのロングボール、クリアボールがピンチをつくりだしていることが大会の特徴を生かした一つのチーム戦術になっていた。

2. 日本のGK

チーム全体のテーマとして、代表選手としての誇り、責任、自覚、プレッシングテクニックの徹底を掲げ、守備において組織とバランスを意識したディフェンスをチーム

に優勝を目指し取り組んでいった。

その中でGKもチームのテーマに基づき「次のプレーの予測」をチームに大会、合宿を含めて取り組み、次のプレーを予測するために何が必要なのかを選手と確認し、いろいろな状況の中で観て、伝えることを徹底させ、常にリスクマネジメントをしながら、プレーのできるようにアプローチをしていった。

本大会ではシュートストップ、プレイクアウェイ、クロスの場面で良い状況判断のもとプレーすることができ、危険な状況にも最終冷静に対応していた。技術的にも他のチームのGKと比較して見劣りすることはないが、チーム全体としてやや切り替えが遅く、GKからのダイレクトプレーに対する準備ができず、ロングキックの正確性はあるものの、ニューキャッスルのようにチームの攻撃の戦術として生かすことができなかった。

他のGK、チームと比較してフィールドプレーに関して自信を持ってプレーしていること、味方選手のサポートの意識とGKの準備の良さ、ポジショニングのクリアなかの判断の確かだったことが印象に残った。GKを含めたフィールドプレーとの関わり合いが今後の課題と思われる。

※開催日時44ページ

日本女子代表 オーストラリア遠征

報告者 澤村公新
(GKプロジェクト/日本女子代表 GKコーチ)

1. 大会におけるGK

今回の遠征では、2試合が組まれ、1ゲームずつ山崎のぞみ(カルフォルニア・ストーム/アメリカ)と福永美穂(岡山湯郷)を出場させることができた。ゲームまでのトレーニングとしては、GKテーマを基本として、シュートストップ、プレイクアウェイ、クロスと、パララクスよく行っていた。一見単調な攻撃に感じられるが、プレーにおいて、先手をとることで技術が生かされるので、選手たちには観るタイミングを良く考えるようアプローチした。

シュートストップ、プレイクアウェイは、出し手の状況、位置、そして最終アウトの位置、状況をよく把握するのかが、クロスも同様、クロスを出すプレーヤーの状況を把握しながらゴール前の状況を観る。そして、GKの準備を早くしながらDFへの指示などでゴール前をオーガナイズするこ

とによってグッドコンディショニングから安定した守備ができるというように、GKがどのような状況でもあせらずに先手をもってプレーすることで安定したプレーを生み、チームへの貢献もできるということを理解させながらトレーニングを行った。

山崎、高くコンパクトなDFラインを保つチームの中、常にスタタティングポジションをとり続け、ラインの背後も積極的にカバー。ゴール前のスルパカスカの対応の場面でも、最終アウトからの飛び出しはしっかりと観ることと把握しておくことにより、先手がとれてよいポジションからクロス対応をブロックできていた。シュート対応についても、判断の良い飛び出しで処理していた。ただし、ワンシューティングの交錯があった。中の状況が把握できており、DFもいることを理解しては、「積極的に狙う」すべアタック」ではなく、DFにまかせてGKはゴールを守るといったプレーもよいものでは、ということも勉強できたのではないだろうか。

横越ゲームを通じてスタタティングポジションを意識してとり続け、ボールを奪うケースが多かった。シュートストップ、プレイクアウェイにおいても、積極的にアプローチした。クロスに関しては、まだまだボールタッチャーとなるシーンが多かった。クロスを観ることができず、したがって上がってからの対応が遅れていた。

前半に2つの失点があり、ひとつはGKのボール保持時間が長く、オーバートイムとられて間接FKからのゴール。積極的なプレーからボールを奪えたにもかかわらず、GK自らがアシニアブルをとり配球できなかったためのファウルであった。もう1失点は、ゴール前でスクラブルからのシュートをファンブルしてのゴールであった。確かに攻め込まれ遅延からのシュートだったと思う。

ただ、GKがからんだ失点ではあったが、その後、気持ちの面を閉ざさずにプレーしていた。このメンタルの部分は評価したい。

最後に、両GKとどこでもボールを奪ってからの配球といったところでの課題が見つかった。GKのプレーはボールを奪って仲間をつなげる一連のプレーであるということの理解、意識して今後のトレーニングに生かしてもらいたい。



テクニカル・ニュース Vol.7

- 発行人：田嶋幸三
 - 編集人：財団法人日本サッカー協会技術委員会・テクニカルハウス
 - 監修：財団法人日本サッカー協会技術委員会
 - 発行所：財団法人日本サッカー協会 〒113-8311 東京都文京区サッカー通り（本郷3-10-15）JFAハウス 電話 03-3830-2004（代表）
 - 発行日：2005年5月21日
-